

六回の御約束で書いて来た雑文、今回で終りになる。わたくしが村の林檎倉庫の隅で、短歌のほかに書いたのは、長篇小説が一つ、短篇、小さなおはなしなど。どこにも出さなかったその一つを書いて、終りにしたい。

杏の天神さん

村のはずれに、杏の天神さん、と呼ばれる人が住んでいました。

これはおかしい、とお思いになりませんか。天神さんなら梅の木のはずです。「杏も桃もものうち」という言葉のとおり、杏は梅ではありません。そう、木がちがうのです。

この人のことを、みんなは杏の天神さんと言いました。

杏の花が好きなので、杏の林に囲まれた小屋に住んでいました。一人つきりでした。小

屋のそばに小さな畑をつくり、ごくたまに頼まれたときには、お手伝いをして普通の半分の御礼をいただき、自分から人を訪ねることはせず、人様の御迷惑にならないように暮らしていました。

長い冬が過ぎると人々は炬燵を出て、山の雪形を眺めます。何時頃に何の種を蒔けばいいかを、雪形が合図をするからです。そして必ず言うのでした。「そろそろ天神さんが笛をはじめるところだわなあ」

毎年、杏の花は桜よりも林檎よりも早く咲きました。うす桃色のはなびらを、枝先までつけた杏の花は、ほかの花より早いのを恥ずかしがるようにお日様に向いて笑います。夜はあたりが暗いので、昼より気楽にお月様に笑いかけます。すると必ず笛の音が歌い出す

のが毎年の約束でした。

天神さんが吹くのです。

昼はひねもす、ひらり ひらひら

夜はよもすがら、びろり びろびろ

そらはじまった、と村の人は目を見合せて頷きあい、一緒に耳を傾けるのでした。

杏の花は笛に乗り、小さい蕾はのび上り、大きい蕾はほっかりと唇をひらきました。満月ならばなおさらに、天神さんの笛は一晚中、眠らず休まず、息も切らさず歌いました。月の光と花の色と笛の音とが立ち籠めて、杏林のあたりだけを霞のように、白く明るくうつすらと、やさしい匂いが包みみました。

でも、杏の花は桜よりもずっと盛りが短いのです。運わるく雨でも来れば一夜きり。運がよくて思う存分咲いた花も、決して長居はしないのです。

「なにしろ盛りが短いで、天神さんは、よけいやさしく吹くのじゃろ」と、和尚さんが言ったので

「な——るほど」と駐在さんが答えたとか。

けれどもその時季がすぎると、村の人は天神さんのことを忘れました。りんご畑の林檎は、花のうちから摘みはじめ、小さい効果も切り捨てて、お金になる立派な実だけにしなければならず、豆も野菜も田んぼの仕事も一

風歌の風景

⑪

齋藤 史



おはなし

度に押し寄せてくるからです。

天神さんは人のお邪魔にならないように河のあたりにいました。岸辺の葦が青い芽をつんつん伸ばし、緑の葉を茂らせ始めた中に座って、笛を吹いていました。

青い葦の歌です。ヒョーロロリ、ヒューララリ　ピロピロリ

河の浅いところに一羽の白鷺がいました。一羽きりでした。不思議な音に驚いて、持ち上げていた片脚をゆっくりと下し、二本足で立ち直してから、音の方を眺めました。

天神さんも鷺を見ました。白い鳥は白い雲の落しもの、空を翔ぶものだけが持つ清しさに、眼を吸われたとき、笛は歌い出していました。

鷺は、少しからだを沈めたかを見ると、ふ



わりと舞い上りました。自分の気の付かないうちに、笛の音に乗っていたのです。風に呼ばれたのと同じように。

青葦のみどりの上を、すうっと白い線が流れました。河の光る所まで来ると、半円を描いて向きをかえ、川下へ、水すれすれに滑るかと思うと宙に昇り、川上へ。真つ直ぐに伸べた羽は銀の板になり、波打つ羽は撓い切つて今にも折れそうになりながら、たちまちに盛り返し、つばさの先の羽一枚ずつが空の中に拡がって、霧氷のように透けました。

陽に光り、水に光り、風に光り、ヒラリ　ヒラリラ　ヒロロリラ
スラリ　スラリラ　ヒロロリラ
天神さんの笛も楽しく歌いました。

一人と一羽に楽しい日が続くうちに葦の緑は日に増して濃くなってゆき、行々子たちは仔育てを終って、夏でした。

夏は都会の人間がやって来ます。自然の中に来たのだから何をやってもいいのだと勝手に決めた人間達が遊びまわるときは、草にも樹にも生きものたちにも危ない季節だったのです。

白い鳥は、白いボール紙を切りぬいた一枚の標的と同じにされました。

鷺は、射たれて水に落ち、ひと塊りの雪になって流れてゆきました。水とは違う冷たさが、からだの芯まで滲みて来ます。いつもと違う河の流れがどこかへ運んでゆくのです。遠いところで風が吹き、風にまぎれて切れ切れに笛が聞こえているようでした。

天神さんは待っていました。笛を抱いて、いつものところで、空を見ながら待っていました。いつかは鷺が帰って来て、笛と一緒に遊ぶでしょう。もしかしたら雲の向うへ行こうと誘ってくれるかもしれません。今日も、明日も、その先の日も、ずうっと待っているのです。

(さいとう・ふみ「原型」主宰)

※齋藤史氏の連載は今回が最終回となります。